

中世騎士物語

ゲルハルト・アイク

鈴木武樹訳

中世騎士物語

定価 二〇〇〇円

一九六五年一〇月二〇日第一刷発行
一九八一年六月二五日第九刷発行

訳者 © 鈴木 武樹

発行者 中 森 季 雄

印刷者 山 田 博

発行所 株式会社 白水社

東京都千代田区神田小川町三の二四

電話 営業部(三三)七八一
編集部(三三)七八二

振替 東京 九一三三二八

郵便番号 一〇一

三陽社印刷・加瀬製本

(分)0097(製)71055(出)6911

中世騎士物語

GERHARD AICK

Die Schönsten Rittersagen des Mittelalters

© Verlag Carl Ueberreuter, 1963

Copyright in Japan by Verlag Hakusuisha

中世騎士物語



ゲルハルト・アイク

鈴木武樹訳

白水社

目

次

ロラン伝説

シャルルマーニュのイスパニヤ遠征／マールシーリ^{III}の掃服／ガヌロンの裏切り
／ロンセズバリエスの戦い／オリファンの呼び声と皇帝の復讐^{ふくしゅう}

9

エルンスト公

エルンスト公の生いたち／エルンスト公と部下の騎士たち、聖地に向かう／掃国

35

アーサー王と円卓の騎士たち

アーサー王

アーサー王の生いたちと即位／玉座をめぐる争い／アーサー、イタリアに向かう
／円卓の設置とマーリンの死

63

61

ライオンの騎士イウエイン

ふしぎな知らせ／畏^{おそ}に落ちたイウエイン／ガーウエインのいましめ／荒野のイ
ウエイン／ライオンの騎士／リュネートの囚われとその救出／たがいに争うふた
りの友

78

エリクとイーニード

貧しい伯爵の家／勝利、そして婚礼／イーニードの警告／エリクの騎士魂／オリ
ングルズの求婚／ブランドイガン城の秘密／エリクとイーニードの勝利

104

トリスタンとイゾルデ

トリスタンの生いたち／トリスタンとモロントの戦い／トリスタン、こがねの
髪^{かみ}の姫を求める／愛の薬／発覚／トリスタン、一命を拾う／モーロイスの森で／
イゾルデの掃国とトリスタンの別れ／白い手のイゾルデ／阿呆^{あほう}のタントリス／ば
らとつる

128

バルチファル……

168

ガミューレーとヘルツロイデ／バルチファルの生いたち／バルチファルと騎士たち
／阿呆^{あほう}、世の中へ出る／バルチファル、名前と素姓^{すじやう}を知る／アーサー王の宮廷で
／《赤の騎士》バルチファル／バルチファルとコンヴィラミール／バルチファ
ル、聖杯にめぐりあう／聖杯の神通力について／雪のなかの三滴の血／キュンド
リの呪い／ガーウエインの愛の奉仕／ガーウエインとアンチコニー／受難の金曜
日の魔法／魔法使いクリングソルの《ふしぎの城》／ガーウエイン、最高の榮譽
を得る／キュンドリ、恩寵^{おんちゆう}を伝える／聖杯王、バルチファル

ローエングリン……

230

エルザの苦境／ローエングリンの召命／神の裁き／不幸な問い——ローエングリ
ンの別れ

ランスロット、および円卓騎士団の最後……

242

湖のランスロット／ガラハド／《危険の席》の騎士／秘密の供物皿／不吉な饗宴^{かうえん}
／ガーウエインの反抗／ガーウエインの最後／アーサー王、妖精の国アヴァロン
へ移る

タンホイザー……

277

さすらいのタンホイザー／タンホイザー、ウエヌスの山にはいる／タンホイザ
ー、ローマに巡礼して死す

解説……

291

ロラン伝説

「ああ、悩みに満つるこの世かな」
(『ロランの歌』の最終行)

シャルルマーニユのイスパニヤ遠征

シャルル大帝の帝国は大西洋の沿岸からドイツの森林山脈に至るまで、また、緑なす北海の岸べから雪におおわれたアルプスの峰々に至るまで、広がっていた。そしてこの国では、いくつかの民族がたがいにならざるを営んでいた。キリスト教の信仰と、神を敬うゆるぎない心とが住民をすべて一つに結びあわせていたのである。人びとは今日でもなおこの帝国のことを、畏敬の念をこめて口にする。もちろん、キリスト教はこの国の版図のそこにおいてもすでに勝利の行軍の途についていたが、それでもまだ諸所方々で異教を相手に苦しい戦いを行っていた。しかし、世界じゅうのキリスト教の戦士たちはシャルルマーニユを正統の信仰の最高の保護者と仰いで、望みをすべて彼に託していた。

この西洋の支配者はどこよりもまず、日のさすイスパニヤにむかって憂わしげな眼差しを向けていた。その土地では、イスラム教がキリスト教の十字架を激しく圧迫していたからである。信仰あつき者たちがイスパニヤにおいて激しいいくさを戦いぬいているありさまに思いをいたすたびに、皇

帝の額には悲しみの影が深く立ちこめるのであった。

コーランと予言者の緑の旗とを東洋からイスパニヤへもたらしたムーア人たちは、いまやイベリヤ半島の広大な領域を手中に納めていた。彼らの強大な王たちのひとりにマールシリョと呼ばれる者がいた。彼はエプロの肥沃な山あいにある町、サラゴッサに王宮をかまえていた。そして長いあいだ、真の信仰とこの国のキリスト教徒たちとは、彼を恐れる必要はいささかもないかのごとく思われた。いや、それどころか、このムーア人の王はシャルルマーニユにたいして恭順のしるしを示すことすらした。ところが、自分の力がしだいに増大するにつれて、彼は素顔を現わした。まず手はじめにサラゴッサとその周辺にあるキリスト教会を打ちこわし、ついで、イスラム教をさらに遠い土地にむやり植えこもうとしたのである。迫害された者たちは勇敢に抵抗したので、マールシリョは海のかなたからムーア人の王をいまひとたびよせた。ふたりのサラセン人の王の剣はキリスト教徒たちのあいだで、当たるを幸いとばかりに荒れくるった。彼らは下エプロの町、トルトーサを占拠し、そこを根城にしてこの国の四方八方に苛酷な鞭をふるった。

苦境に陥ったキリスト教徒たちは、シャルルマーニユに救いを求めることに衆議一決した。

この広大な帝国にはいたるところに皇帝の城、つまり、彼

が自分の帝国を統治する拠点の館ぐんがそびえ立っていた。これらの館ぐんはラインの河畔にも、セーヌの河畔にも、ローヌの河畔にもあり、また、はるかかなたの、南アルプスのケルンテンの領地にも一つあったが、後者は、そこへ行けば今日でもなお望み見られる。しかし、この支配者がもっとも好んで滞在したのはエクス・ラ・シャペルの館ぐんで、南方からの使者たちが足を向けたのもまたこの土地であった。

皇帝はイスパニヤからの凶報を耳にすると激しく心を痛め、憤怒に駆られるがままに、玉座から立ちあがって叫んだ、「この侮辱は、永遠の神に誓って、かならず晴らしてみせるぞ！ わが帝国の軍勢をすべてイスパニヤに投じて、マールシーリマルセリをはじめとする異教徒どもの悪業を懲らしめてやる。」たちどころに彼は勇敢な司教チュルバンら、いくさにたけた十二臣将の勇士たちを招きよせた。これに応じて馳せさんじたのは、若き勇士のロランとオリヴィエ、豪勇の伯爵ワルタリウスとオトン、狡猾なガヌロンに、その他、フランスや、ライン河畔、ドナウ河畔の貴族たちであった。

しかし、なかでもこの偉大な支配者がもっとも目をかけていたのは、妹の息子むすこ、ロランであった。この若者はいまだ若年にもかかわらず、すでに幾つもの戦いで真価を発揮し、比類のない榮譽をその名に結びつけていた。ロランが主君の皇帝とキリスト教の神とのために剣を拔けば、敵たちは顔あおさめて恐怖におののくのであった。さて、この若き勇士は三つの財宝をわがものと呼んでいた。その第一はデュランダー

ルの剣けんで、この名まえは《不滅の刃物》というほどの意味である。もちろん、このデュランダーはすばらしい刀ではあったが、しかし、十二臣将のうちにはこれと似た選りぬきの剣をふるう者はほかにもまだいた。しかし、彼の角笛かくふえオリファンの右に出るものは一つとしてなかった。ロランがこの銀のラッパを、力をこめて吹けば、その音は天の雷にも似た響きを数マイルにわたってとどろかせるのであった。ロランの持つ貴重な宝の第三は皇帝と帝国のためになるものではなく、もっぱらこの若者の心の中にみ属するもの、すなわち、友人オリヴィエの愛らしい妹、オードであった。彼はいすれ近いうちにこの乙女を妻にめとるつもりでいた。

もちろん、運命はこれを許さぬことにすでに決めていた。ムーア人たちにたいする、聖なるみいくさが皇帝の口から告げられ、ロランとオリヴィエは他の勇士たちに和してこう叫んだのである、「不信の輩やうばいに立ちむかい、あの南の国の、キリストをあがめるわれらがはらからるために、われらが勇猛の心はすべて、われらがこの血はすべて、捧げるといたしましう！」

一大軍勢の先頭にたって、シャルルマーニュはイスパニヤに向かった。時はあたかも格好のところおいであった。というのは、サラセンの大軍はすでにピレネー山脈を越え、となりのフランクに恐怖と驚愕おどろくとを広めていたからである。しかし、ムーア人の王は、キリスト教徒の強力な一軍が近づくのを知ると、ふたたびイスパニヤへ引きかえした。だが、西洋



の盟主は彼らのあとを追ひ、部下たちをイベリヤ半島の小石の多い大地に進めて、その地の戦士たちにキリストの助けをもたらし、圧制の徒の手から彼らを救いだすことに決然と心を決めた。

シャルルは戦闘行為にそなえて軍旗を広げるまえにいまいちど平和の道を選んで、ムーア人の心にキリスト教の信仰を認める気持をかきたてようと試みた。そして、マールシーリ^{マルシーリ}とのかつての友情を思いおこしてサラゴッサに一団の使節を送り、サラセンの王に穏便な和議^{なんびん}を提した。

しかし、マールシーリ^{マルシーリ}は商議に応じず、使者たちを残忍な手口で殺害して、皇帝には屈辱的な言葉^{ことば}を返してきた、「エプロ川を渡れるものなら、ぜひ渡ってみるがよい！ 難攻不落の砦^{とりで}が二つ、イスパニヤへはいる城門の柱がわりに、この川を守っているわい。その名はこれ、サラゴッサとトルト^{トル}ーサ。」

使節たちの、無限に神聖な、犯すことの許されぬ権利を踏みにじった、この陰險な殺害行為はシャルルを心の奥底から激怒させた。彼は憤怒に燃えて、まずトルト^{トル}ーサの町に攻めよせた。マールシーリ^{マルシーリ}は、この強力な軍隊が近づくのを見て恐怖にとらわれ、そして、その軍勢のまったくだに、風にそよぐ白髯^{しろげ}のあるのを認めて、それこ

そ皇帝その人であることを知るや、いやがうえにもなお驚いた。そのうえさらに、角笛の音がとどろきわたってあたりの空気をふるわせると、ムーア人の王は恐怖にわななき、心のちぢむ思いをしながら叫んだ、「ええい、これはしたり、あれはオリファン、ロランの角笛だ！　これでわれらは完膚なき敗北だわい！」

堡壘も城壁も柵も、フランス軍の襲撃にあつてはひとたまりもなく、ムーア人たちがどれほどおしく勇敢・奮闘しようとも、彼らは最後のひとりにいたるまで屠りころされてしまふのであつた。

マールシーリヨは、予期に反してトルトーサが落城したのを知ると狼狽したが、しかし、シャルがこれいじょう深くイスパニヤに攻めいることはよもやあるまいと、たかをくくっていた。というのは、ムーア人の城砦は、さながら引きさがたい鎖のように、はるか南方まで無数に延びていたからである。

コルドバの町ではムーア人の技芸が最高の開花を誇り、ムーア人の生活がこのうえなくきらびやかに繰りひろげられていた。そこには回教の寺院や王宮が立ちならび、その石壁はあたかもレースの織物かなにかのように繊細に彫琢されていた。ムーア人の支配者たちは、この町にいれば頑丈な堡壘に守られているので、故郷のアラビヤにでもいるかのような、身の安全を感じることができるのであつた。

しかし、町は一つまた一つとフランス軍の手に落ち、つい

にこの誇りたかいコルドバまでも異国の征服者に屈服せざるをえなくなつた。

いまは、西洋のこの偉大な支配者に抗するものといえ、わすかにサラゴッサがあるのみであつた。

マールシーリヨの帰服

恐ろしい不安にさいなまれて、マールシーリヨは助言者たちを周囲に呼びあつめた。「まあ、聞いてくれ」と、彼は落ちつきを失つて、齒をきしらせながら言つた。「たつたいま、たいへんな知らせが届いて、あの半月の飾り物、誇りたかきコルドバが敵の手に落ちたという。キリスト教の十字架が、あの町の教会という教会の尖塔にまともや光りかがやくのだ。このぶんでは、あの野蛮な男の怒りがわれらの頭上に襲いかかる日も、かならずや遠くはあるまい。」

この通告のあとには深い沈黙がつづいた。助言者たちは落胆の色を目に浮かべ、それから、意気沮喪したようすで頭をふり、このゆゆしい一大事にたいして言うべき言葉を知らなかつた。

ついに、老獪なブランカドリンが口を切つた、「予言者の髯に誓つて申しあげますが、陛下、わが君のお言葉はまことにそのとおりでございます。あの皇帝は軍勢を引きつれて

サラゴッサの郊外に現われ、門をわれらが開きませねば、いたく手あらにたたいて、こなごなに打ちこわしてしまふこととございましょう。……すれば、われらがごとく破滅するは必定！」

「われらが破滅は必定、われらが破滅は必定！」と、円座する老人たちはつぶやいた。

「いかがすべきか？」と、マールシーリは暗黙な黙考からふとさめ、激怒して言った。

「穏和に商議いたすが得策かと、申しあげたいところでございませう」と、狡猾なブランカンドリンは答えた、「さよう、そう申しあげたいところでございますが、ただ……」

「ただ……？」と、王は家臣の言葉をせわしくさえぎった、「その《ただ》とはなにか？」

「さよう、ただ、わが君が皇帝の使いの者たちを殺しておられますので、それさえなければでございます。あのフランクびとたちの血を、いまやわれらは幾千倍にもして償わざるをえぬのでございます。」

マールシーリはふたたび齒をきしらせ、「そうであらうな」と、悲しげにひとりごちた。「和議か死か、そのいずれかを選ぶことは、いまとなつては、われらにはできぬわけだ。……われらにはもはや死しか残されておらぬのだ！」

「ええい、あのいまいましい、呪われたしわざさえなければ！」と、老人たちは絶望して髪の手を引きむしりながら、意中をふたたび言葉に現わした。

ブランカンドリンはこれを見て、わが事なれりと悟り、このふんならば主君とその助言者たちに、わが心に思うところを提議できよう、と考えた。「コーランの御言葉に誓つて申しあげますが、陛下、ただいまのわが君のお言葉もまたそのとおりかと存じます。あの皇帝に和議を提することは難事のきわみで、シャルルはおそらく剣をもって返答といたすこととございましょう。それでもなおかつ、帰服の意を申しでて許しを乞ふことこそ、肝要かと存じます。おごそかに誓約をたて、甘い言葉を舌にのせ、眞の品物で皇帝の心をひくのでございます。」

マールシーリは自尊の心の反抗に駆られ、いまいちど激昂して言った、「気でも狂ったか、ブランカンドリン？ われら、誇りたかきアラビヤの子に、あのキリスト教の犬めのみえで身をかがめて許しを乞ふと申すのか？ しかもそのうえ、思うに、あの男はよもやわれらが帰服を受けいれはすまい。」

ブランカンドリンはそれを肯つて会釈をし、それからうやうやしく答えた、「やんごとなきわが君よ、あいもかわらずそのお言葉に誤りはございませぬ。アラールの神と予言者の緑の旗に誓つて申しあげますが、いかにもそのとおりでございます！ まことに、あのシャルルにしてみれば、わが君の誇りたかきお心ばえに恵まれておりますれば、帰服も容赦も論外と申すべきでございましょう。だが、あの男めはフランクびとのひとり。して、この民は三歳の童子のごとく、いとまた